



御下問答議

明治三年六月一日

服部元彰

御下問答議
服部元彰

服部文庫
イ 17
2189
51



特
2189
51



御下問拜答

理財之道量入為出ノ基礎富國強兵ノ本根可被
為立 御下問三々奈不憚忌諱謹而尤ニ言上仕候
一 惡金銀之事

右私鑄嚴禁ノ法舊制ノ如ク盜鑄ノ者ハ嚴科ニ
處セラレ度候總テ金銀銅トモ良好ノ品ヲ以世界
ニ耻サレ新貨幣御鑄造アラセテ之ヲ摸擬スル事能
ハサラセメハ自ラ私鑄ノ惡相絶可申候且又是迄私
鑄ノ分ハ綱紀類地兵際ニ業ニ名儀ニ云ハ嚴刑
モ施サレ難ク候間此度御紀ノ上漸ヲ以鑄造ノ員

數々^御脚償^御セ可然候在モ無之ハ此後如何様脚
嚴禁 仰出サレ候モ四海通奉仕間敷候
贖金通用停止ハ勿論ノ儀ニテハ兵馬騷擾ノ
際諸處ニテ偽造致シ良民ノ手モ澤山落ケ
居候ハ即時ニ通用停止 仰出サレ難ク何卒
引替ノ道ヲ以テ停止被 仰出候様有之度奉
存候

一 内外國債之事

右ハ一ヶ年一割ノ利分ト御見積被為在候儀
ト奉存候是ハ一ヶ年五分ノ利ト御定メ御下

渡相成候所ハ如何 御國內ノ分ハ五分ニテ迄
分ト可申候在候ハ十萬五千石ノ現米ヲ減シ可
申候其元債ノ御返濟ハ御見込ノ如ク十ヶ年濟
ニテ可然欵ト奉存候

一 歳入歳出之事

御別紙ノ趣ニテハ免九二分五厘ノ薄稅誠ニ
御仁徳ヲ敷セラレ候儀ト難有奉存候凡租稅
ハ薄キヲ以道ト致シ候ハ此際ニ至リ格外薄稅
被 仰出候ハ却テ良民ノ怠惰ヲ醸シ候様
可相成哉舊政府ニテハ大抵三分五厘ヲ以テ定額

ト致シ候ヤニ承リ候諸藩ニ至テハ四分ノ處多有ク
候在候ハ三分五厘ハ不高不低民モ難誌仕向
敷候尤ニ五分五厘ハ田畠ノ厚薄ヲ以テ平均相
成候ニ可有之候ハ凡見今ノ時勢古昔ト同シカ
ラズ何卒大抵平均三分五厘ニ相當仕様土地ノ
肥磽ヲ以テ御定メ相成候ハ御歳入七十九万
二千石餘ヲ現米ヲ増可申且諸藩ヨリ定
額ノ如ク軍資金上納仕候ハ十二万三千石餘
現米ヲ減スヘク候御賞典ノ二十五万石ハ永制ニ
候ハ申迄モ無ク去年ノ軍功ヲ賞セラレ候不

時ノ典ニ候ハ来年ヨリハ御經費ノ目ニ入リ申
スシク又降伏人御扶助ノ廉モ永制ニ無ク奉
存候又諸税其實ヲ審ニセラレサル由ニ候ハ推
計リ候儀ハ決而難出来候ハ凡必百萬金ニ下
リ申間敷款其事ニモ節儉ヲ奉トセラレ御定額
ノ諸目格別御取締溢出無ク様被遊候ハ遊
荒不虞ノ御備迄此度相立可申候若シ右ニテ
モ不行届廉有之候ハ止ラ不被為得國債皆
濟迄十々年ノ間五厘ノ税ヲ増貢被 仰仕候
ハ十分ニ御足り可被遊候 皇徳決治萬

民鼓腹仕候ニ三四ノ免被 仰付候トモ下民
ノ傷ニ相成申間敷致尚又貿易ヲ盛ニシ
生産ヲ御殖ニ被^増在候ハ富國ノ道次第ニ
相立諸藩モ漸ニ疲弊ヲ養ヒ藩屏ノ任ヲ耻
カシメサルニ至ラハ是ニ過先強兵ノ道有^レ間敷
其時ニ至テハ大費用コレアル時タト^レ諸藩ヨリ貢
全被 仰付候トモ 皇國ヲ弱ニ相成申間敷
ト奉存候

右^真裁ノ管見ニ候ハ凡包藏罷在候モ恐入候ニ
閣下迄言上仕候誠惶誠恐謹言

六月二日
議長公閣下

尾崎忠篤
服部清三郎

服部文庫
117
1937
197



御下問答議

今般政體御改正可被遊ニ付見込有之者ハ無忌憚
可申上旨奉拜承候臣短才淺学絶テ及ハサル所
殊ニ至急ト有之候テハ別而言上可仕見込無之候
然シナカラ重大之御沙汰篤ト愚考仕候ニ此度至
急ノ御改正ハ乍恐不可然歟ト奉存候抑政體ハ
万世不朽ノ規模ヲ立テサセラル、所以天下ノ表的
ニシテ一言半句モ空文徒法ニ属シ候テハ不相濟
一旦御改正相成候上ハ容易ニ御變更難被成候
間廣ク宏才篤学ノ者ヲ被為選熟論精議シテ

一定ノ體ヲ^{被為}御立無^度之小末相叶奉存候夫古今ノ沿革ヲ明ノサレハ將來ノ得失ヲ講スル^一能ハス宇内ノ形勢ヲ^連連觀^也セサレハ時世ノ適宜ヲ得ル^一能ハス必古今ノ沿革ヲ洞明ニシ宇内ノ形勢ヲ達觀スル者ニシテ後能之ヲ辨スヘク尚其上ニモ識度宏遠ノ者ニ非レハ衆楚ノ咻ニ眩惑シ易カルヘク候ヘハ人才篤ト御精選ナサレ半年掛リ候トモ一年掛リ候トモ熟論精議ノ上粗漏ノ遺憾ナキ様御改正被遊可然候昨年御頒布相成候政體ハ尚兵馬未定ノ際ニ定メサセラレ

タルユヘ只今ニテハ大分空文ニ屬シ候件々有之候是~~母~~ハ非常ノ時ニ當テ必ス御改革ノ事無シトハ申シ難ク候ヘハ仔細モ無之候得共政體ノ末ニ改革セント欲スルノ條件アラハ大會議ヲ經テ之ヲ決^以ヘシトノ文既ニ空文ニ屬シ又第五章官等ノ制ヲ立ツルハ各其職任ノ重キヲ知り敢テ自ラ輕ンセシメサル所以ナリト^ノ條モ有之処三等官以上外國ニ對シ大臣ト稱スル御方ニモ時トシテハ豪宕ニ失シ世人ノ議論ヲ^招願^給給^也人モ有之ヤニ承リ候是等ハ躬行

ノ細事トハ申ナカラ誠ニ大臣ノ體裁ヲ失フノミ
ナラス御條目全ク空文ト相成候是迄ノ分ハ先ツ
ソレニテ相濟（印）候ヘ天下一定ノ今日御改正
相成タル上六聊タリ臣空文ニ属シ候テ天下ノ表
的トナルサテ置キ疑惑シ抱キ誹議スル者モ可有之
候総テ事ヲ倉卒ニ辨スル時ハ天下ノ俊才ニ非ル
ヨリハ智者ノ一失無キヲ能ハス願クハ追々御改正
可有之上旨一應御布告被成置差當リ改メラ
ルヘキ庶ハ改メラレ事ヲ急カセラレス人才御精
選ノ上熟論精議致サセ尚

御廟議ヲ被為盡御確定相成候方可然奉
存候

六月七日

尼崎公議人 服部清三郎

駿河同 杉浦 誠

松江同 兩木謙三郎

新宮同 矢田武右門

出石同 麻見達左門

守山同 岡田又吉太郎



御下問寛刑答議

謹議今也大政更始數百年武断ノ陋習ヲ除去リ寛
 恕ノ政ニ從ヒ忠厚ノ俗ニ復シ萬民ヲノ所ヲ得セシメ
 御國威ヲ振起サセラレントテ凡ハ虐故殺強盜放火
 等ノ外異常法ヲ犯スニ非ルヨリハ大抵寛恕以テ流
 以下ノ四討ニ處セラレントス嗚呼好生ノ 聖徳天覆
 地載何者カ感泣セサラン至治ノ隆運不日ノ期スヘキ
 ナリ伏願ハ早ク茲 聖旨ヲ體シテ新律ヲ撰
 定セシメ玉ハシテ抑刑ノ教ヲ助ル所以之ヲ殺ス殺
 サラシカ為也臨下以簡御衆以寛徳教以テ之ヲ

後案云去年
十月晦日重罪
及焚刑最首
二易此御布告
此詞改云

化之兆民驩虞ノ域ニ入ラ刑措不用是ヲ期于無
刑ト云謹案刑罰ハ世輕世重時ノ汗隆ト俗ノ
醇薄トニ因ル放火ノ刑舊政府ニ在テハ焚刑タリ
今何等ノ刑ニ處シ玉フヲ知スト雖モ必死罪ニ處セラ
ルヘキニ似タリ夫放火漢土ノ律ニ在テハ官民房屋及
公解倉庫係官積聚之物ヲ故燒モノト因而盜
取財物者トニ非ルヨリハ罪不至死 皇國ノ律殘
缺ニテ其詳ヲ得スト雖モ人舍屋及積聚之物ヲ
故燒テ盜者ハ計所燒減價併賊以強盜論スルヨシ
賊盜律ニ見ユ注ニ依雜律故燒人舍屋徒三年ト

見ユ又中原章任ノ抄ニ雜律ト寶龜延曆格トヲ
引テ曰如律條者依所燒之贓或處流罪或處死罪
而寶龜延曆格不論官住等衆格煞者ト見ユ之
ヲ以テ觀テ大寶律ニ定ル所其寬ナルヲ知ルニ律
ヲ判定セラレシヨリ寶龜延曆ニ至ル迄百年ニ滿ス
其刑既ニ漸重シ世乱ニ随テ放火ノ害多キヲ知ル
武斷ノ時ニ在テハ其差ヲ問ハスシテ焚刑ヲ施スモ可
ナリ王政ノ今日ニ在テハ焚刑ヲ廢シテ斬トシ又其
差ヲ論シテ流或徒三年ト為シ玉ハシモ可然欽ト
奉存候

九月十日

尾崎議員服部清三郎謹議



大学別當ヨリ

朝裁ヲ乞所ノ学規綱領孔庙釋

奠御廢止ノ儀何ノ所見ヲ以テ如此說ヲ唱アルヤラン

徹臣等ノ解セサル所ナリ抑孔子異國ノ人ト雖モ

倫理綱常ノ彛治國平天下ノ道ニ至ル迄皆由

元傳フル処ナリ 皇國ノ

聖天子其道ノ可興而不可廢ヲ識鑿ニシテ

其学ヲ採リ其道ニ法リ玉フハ外ヲ貴ヒ内ヲ賤シメ

玉フニ非ス彼ト我ト風土ノ相似タル人情ノ相均シキ

皇國ニ在テモ一日モ其道ノ闕ヘカラサルヲ以ナリ故
ニ其功德ニ報ヒテ之ヲ大學ニ祀リ玉フ事令條
ニ掲ケテ著ルシ今御維新ノ日其禮ヲ廢シ玉
ハ、恐心多クモ

應神天皇ヲ奉始文明ニマシマセシ

列聖在天ノ神靈ニ對セラシ其謂之何今天下ニ
示ス所人タル者五倫ノ道ヲ正クスヘシトノ御法
令遐邇僻陋ト雖モ掲ケサル禮ナシ五倫ノ名何
ノ処ニ出ルヤ亦其教ニアラスヤ且也漢籍ヲ素
讀スル何ノ害有テ之ヲ廢スルヤ之ヲ廢シテ何

ノ益アル素讀ヲユルサスシテ質問ヲセム是不戒
視成ノ說ナリ暴暴ニアラスシテ何ソ此規則一名
立タハ 皇國ノ人民漸ク皆蠢意思トナラシ
若シ童牝ヨリ漢籍ニ習ハ、彼ヲ貴ヒ我ヲ賤シ
國書ニ暗ク國體ヲ汙スヲアラントノ嫌ヲ以テ之
ヲ廢ストナラハ西洋ノ書モ亦素讀ヲ廢スヘシ
夫我カ人民ヲシテ 御國體ノ尊キヲ童牝
ヨリ知ラシメントスルハ漢籍ノ素讀ヲ廢スルニ
在スシテ教ヲ立ル何如ニ在ルニ此ニケ糸ノ如キハ
物議沸騰シテ大ニ 聖化ニ害アラン為メニ寒

心スル所ナリ初集議開院ノ日辱クモ
詔ヲ下シ賜ハリ

皇祖ノ遺典ニ基ツクヘキ旨 聖諭アリ

微臣等服膺シテ敢テ不忘今

皇祖ノ遺典ニ戻リ

明天子ノ 聖詔ニ乖ケル言ヲ聞ク敢テ昧
死シテ其不經ヲ辨セスハアラス仰願ク博士
ノ輩ヲ御遺責アリテ早ク規則ヲ改メシメ玉
ハンコヲ 謹議

九月十七日

御下問海陸軍答議

謹議海陸二軍ヲ興張スル方今テノ策其有
ニ因テ之ヲ活用スルニ在リ其有ニ因ルハ藩兵
ヲ用ルニ在リ其兵賦ヲ輕クシ之ヲ疾苦怨
望スルニ至ラシメスハ不費シテ兵足ルヘシ然
レ氏騷亂以來上下疲弊極リ加之諸藩ノ職
タル内ニ藩籬ノ守有リ外ニ海港要地ノ
衛アリ萬一近地變アラシハ不時ノ徵發ニ
供セスンハアラス故ニ又中下大夫ヲシテ之ヲ

彌縫セシムヘシ今中下大夫常職ナク常
賦ナシ之ヲシテ主トシテ常備ノ兵員ヲ
出サシメハ大ニ兵備ニ補アラシ但高多カ
ラサレハ之ヲ合セテ編制スルモ五六大隊ニ
過ヘカラス是以諸藩ノ兵ヲ用ヒサルヲ得
サルナリ今試ニ鄙見ヲ條列ス

一中下大夫高千石ヨリ五人ヲ出サシメ
長上シテ東京常備ノ兵タラシム器械
戎服食糧ハ官ヨリ給スヘシ
一諸藩ハ高一萬石ヨリ半小隊ノ兵ヲ

出サシメ小銃器械ハ藩ヨリ齎シ彈藥戎
服食糧及大砲ハ官ヨリ給ス

一兩京ニ十五大隊ノ兵ヲ備テ宿衛ニ城
門ノ守衛市中ノ巡邏ヲナサシム
御座所ニ十大隊留守ニ五大隊一年
毎ニ交替ス

但東京ハ大都會ナレハ西京ニ
御座ノ時ハ其ニ大隊ヲ減シ東京留
守ニ足スヘシ中下大夫ヨリ出ス所五
大隊ニ過ルハ仍テ之ヲ用ユ

一右ノ兵賊諸藩ヨリ出ス所年ニ十大隊
輪番シ十一年ニ一度ノ賊ヲ出ス

一海軍ハ軍艦ヲ得ルニ随テ其定額ヲ定
ムヘケレ氏先ツ所有ノ軍艦ヲ以テ相應ノ
兵ヲ徴シ習熟セシムルヲ要ス大抵東京
常備海軍ハ五大隊ニテ足ルヘシ事ニ
臨テ随近ノ地ノ兵ヲ徴發スルモ自在
ナルヘシ軍艦ヲ多ク得ルニ方テハ諸要港
ニ備テ相往來スヘシ其兵員ヲ増ス自
ラ其方アルヘシ

一海軍ハ必藩兵ヲ用ヒ水郷ノ兵ヲ以テ之
ニ充テ山國ノ兵ヲ充テス

一東京海軍ノ常備大凡五大隊ト積リ

一一年毎ニ輪番交替スル時ハ二十三年

ニシテ一周ス然レハ諸藩ヨリ海陸ノ賊

ヲ出ス二十餘年間ニ三度トス

一軍艦ハ外國ヨリ買入ル、一無ク傳習シ

テ必ス我手ニ成スヘシ

一諸藩沿海要地等ニ在ル者ハ皆其地

方ノ防備アリ其徴發兵員ノ定額ハ高

一萬石ヨリ一小隊ヲ出サシム是ハ各其藩
ニ備テ徵發ニ充ツ其餘ハ各分ニ隨テ
藩ノ守衛兵トス又肥筑ノ長崎ニ於ル
陸奥ノ箱館ニ於ル等ノ類ハ地ノ遠近ニ
隨テ常ニ其地ニ番上スルヲ有ヘシ
一二軍トモ早ク兵制規律ヲ一定シ諸藩
ヲシテ常ニ練テ徵發ニ供セシムヘシ
右兵備ノ大畧ナリ如此スル時ハ天下處トシ
兵備ナキハ無ク以テ不虞ニ備フヘシ其兵制
ト規律トノ如キハ實地ノ兵ニ練磨セシ者ヲ

シテ研究セシメハ必其法ヲ得シ只目今憂
ル所ハ用度ノ不足ニ在ノミ然レモ今
聖明ノ威靈ニ由テ天下平定シ内地ニ在テ
ハ兵用ル所ナシ是ニ於テ奢侈ヲ禁シ冗
費ヲ省キ理財ノ道一タビ立バ財用富殖
シテ復タ給ラサルヲ患ヘジ兼テ海陸軍費
用ニ充ラル、所ノ現米三十萬石ヲ以テ軍艦
器械等ヲ辨セシニ數年ノ後必完全スル
ヲ得シ謹按スルニ二軍誠ニ方今テノ急務
ト雖モ苟クモ政治ニ關ク所アラハ堅甲利

兵モ徒ニ贅物トナラン政治リ化敷キ庶民
所ヲ得テ而後始テ兵備全ク整ニ欵ト
奉存候謹議

九月十七日

尼崎藩 服部清三郎

鶴田藩 生田 精

鯖江藩 河口 孚

三春藩 奥村權之助

三日月藩 高橋和多留

山形藩 井上八郎

秋月藩 白石真俊

宮津藩 關 清

福岡藩 京極常樹

廣島新田 峯岸正愿

栢原藩 津田謙介

麻田藩 福井大造

丹南藩 西村繼輔

長瀨藩 人見秀雄

山崎藩 立花次郎左衛門

延岡藩 鈴木才藏

出石藩 麻見義脩

日出藩 帆足龍吉
久留米藩 早川與一郎
一之関藩 義貞代 増子作之助

御下問海陸軍答議



方今ノ策

謹議海陸二軍ヲ興張スル其有ニ因テ活用
スルニ在リ其有ニ因ルハ藩兵ヲ用ルニ在リ
●其兵賦ヲ輕ク寒之ヲノ疾苦怨望ス
ルニ至ラシメスハ不費シテ兵足ルヘシ然
ルニ騷亂以來上下疲弊極ルニ諸藩ノ職
内ニ藩籬ノ守有リ外ニ海港要地ノ衛
アリ萬一近地變アラシムハ不時ノ徵發
ニ供セスハアラス故ニ又中下大夫ヲシテ之

ヲ彌縫セシムヘシ今中下大夫常職ナク
常賦ナシ之ヲメ主トシテ常備ノ兵員ヲ
出サシメハ大ニ兵備ニ補アラシ但其高
多カラサレハ之ヲ合セテ編制スルモ五六
大隊ニ過ヘカラス是以諸藩ノ兵ヲ用
ヒサルヲ得サルナリ今試ニ鄙見ヲ條列ス
一中下大夫高千石ヨリ五人ヲ出サシメ
長上シテ東京常備ノ兵多ラシム器
械戎服食糧 官ヨリ給スヘシ
一諸藩ハ高一萬石ヨリ半小隊ノ兵ヲ出

サシメ小銃器械ハ藩ヨリ齎シ彈藥
戎服食糧及大砲ハ 官ヨリ給ス
一兩京二十五大隊ノ兵ヲ備テ宿衛シ
城門ノ守衛市中ノ巡邏ヲナシム
御座所ニ十大隊留守ニ五大隊一年
毎ニ交替ス
但東京ハ大都會ナレハ西京ニ
御座ノ時ハ其ニ大隊ヲ減シ東京留
守ニ足スヘシ中下大夫ヨリ出ス所五大隊
ニ過ルハ仍テ之ヲ用ユ

一右ノ兵賦諸藩ヨリ出ス所年ニ十大隊
輪番シテ十一年ニ一度ノ賦ヲ出ス

右兩京兵備

一海軍ハ軍艦ヲ得ルニ随テ其定額ヲ定ム
ヘケレ先ツ所有ノ軍艦ヲ以テ相應ノ
兵ヲ徴シ習熟セシムルヲ要ス大抵東
京常備海軍ハ五大隊ニテ足ルヘシ事ニ
臨テ随近ノ地ノ兵ヲ徴發スルモ自在ナ
ルヘシ軍艦ヲ多ク得ルニ方テハ諸要港ニ
備テ相往来スヘシ其兵員ヲ増ス自ラ

其方アルヘシ

一海軍ハ必藩兵ヲ用ヒ水郷ノ兵ヲ以テ之
ニ充テ山國ノ兵ヲ充テス

一東京海軍ノ常備大凡五大隊ト積リ
一年毎ニ輪番交替スル特ニ二十三年ニ
シテ一周ス然レハ諸藩ヨリ海陸ノ賦ヲ
出ス二十餘年間ニ三度トス

一軍艦ハ外國ヨリ買入ルハナク傳習シテ
必我手ニ成ヘシ

右海軍

一諸藩沿海要地等ニ在ル者ハ皆其地方ノ防備アリ其徵發兵員ノ定額ハ高一萬石ヨリ一小隊ヲ出サシム是ハ各其藩ニ備テ徵發ニ充ツ其餘ハ各分ニ随テ藩ノ守衛兵トス又肥筑ノ長崎ニ於ル陸奥ノ箱館ニ於ル等ノ類ハ地ノ遠近ニ随テ常ニ其地ニ番上スルヲモ有ヘシ

一二軍トモ早ク兵制規律ヲ一定シ諸藩ヲシテ常ニ練テ徵發ニ供セシムヘシ

右汎論

以上兵備ノ大畧ナリ如此スル時ハ天下處トノ兵備ナキハ無ク以テ不虞ニ備フヘシ其兵制ト規律トノ如キハ兵ヲ知ル者ヲシテ研究セシメハ必其法ヲ得シ只目今憂ル所ハ用度ノ不足ニ在ノミ然レ氏今

聖明ノ威靈ニ由テ天下平定ニ内地ニ在テハ兵用ル處ナシ是ニ於テ奢侈ヲ禁シ冗費ヲ省キ理財ノ道一タヒ立ハ財用富殖シテ不復給ヲ患ジ兼テ海陸軍費用ニ充ラ

ル所ノ現米三十萬石ヲ以テ軍艦器械等

ヲ辨セシニ數年ノ後必完全スルヲ得シ謹
按二軍誠ニ方今ノ急務ト雖モ苟モ御
政治ニ關ク所アラハ堅甲利兵モ徒ニ贅
物トナラシ政治リ化敷キ庶民所ヲ得テ而
後始テ兵備全ク整ヒシ歟ト奉存候謹議

九月廿七日

尾崎藩服部清三郎



中下大夫

千石

五人

十萬石

五百人

九六十萬石

三千人

此七大隊半

五十萬石

二千五百人

此六大隊二隊

中下大夫ハ采地皆最寄府縣ノ管轄ナル采地ノ守備
ナシ故ニカヲ常備兵ニ尽ミスヘシ

一 諸藩

一萬石

半大隊 此二十五人

諸藩總高千八百七十六萬石

所出 四萬六千九百人

此百十七大隊二小隊

一 同徴發兵賦

一萬石 一十隊 五十人

總千八百七十六萬石ヨリ所出

九萬三千八百人 此二百三十四大隊半

一 兩京十五大隊兵食

六千人 日一升 一年食 二萬千二百四十石

日七合五勺

一萬五千九百三十石

御下問宣教使施行答議

尼崎 服部清三郎謹議

今般宣教使被置候段誠以千載ノ御盛舉百姓ノ洪福異教ヲ防クノ術何物カ之ニ加ヘシ但賤臣固陋其御教ノ何如ナルヲ熟知不仕況ヤ其施行ノ法ノ如キニ茫乎トノ所見ヲ知ラス獨リ空切ニ寒心スル所アリ元來 皇國ノ教中古以降神儒佛ノ三ヲ兼用テ凡佛氏ノ教タル愚民ヲ誘導スルニ巧ニシテ千百年ノ久キ愈密ニ愈精ニ是ヲ以テ愚民ノ之ニ傾寫スル者殆ト天

儒者ノ教五倫五常等種ミノ目アリ以テ夫也ヨシ
緯ス千百年ノ久キ愈徴シテ愈尊シ是ヲ以
士大夫ノ之ニ傾寫スル者十ノ九ニツノ者道不
同ト雖モ均シク人情ニ本ツケル者ナリ而我神教
ナル者微乎微ナル者ハ神教ノ尊カラサルニ非
ス其本源儒者ノ道ト大逕庭アルニ非_レズ
別ニ千載不刊ノ典刑トスヘキ書無キトヲ以
ナリ抑耶蘓ノ異教賤臣其門牆ヲクモ窺知
スト雖_レ仄カニ聞西洋各國其教ヲ奉スル者多
シト顧_レフニ必愚民ヲ眩惑スルニ妙ナル者アラシ

嗚呼可畏今 朝命新々ニ宣教使ヲ立ラル必
我神教_{者ニ趣}ヲ開張シ上士大夫ヨリ下愚民ニ至ル
迄奔走傾寫シテ其教ヲ信シ以テ他ニ求メ
ルニ至ルノ教法アル時ハ愚民ト雖モ異端佻氏
ノ如キニ迷フ者決シテ之アルニシク況ヤ邪說耶
蘓ノ如キ者豈尺寸ヲ其間ニ投スルヲ得ニヤ然
ル時ハ天下ノ愉快極ルト云ヘシ萬一其教法愚
民ノ心ニ慊サル処有テ陽ハニ其教ヲ聞テ陰ニ
其說ニ服セサルコト有ラ_レ家到戶說之ニ經ク
ニ刑ヲ以テストモ必其益アルヲ見サラン然_レ時ハ

朝廷ニテ玉フ所ノ善教立タス宣キ玉フ所ノ美
意行ハリス或ハ邯鄲ノ歩ヲ失フ者アラシク是ヲ
以之ヲ觀シハ此舉至大ノ美事ニシテ又至大ノ
危機ナリ必蓋世ノ豪傑ニシテ能ク此道ヲ興
スヘキ歟臣愚曾テ其要領ヲ得ス施行ノ二
件敢テ之ヲ論ヤス謹議

十月七日

尾崎 服部清三郎

御下問北地建言答議

尾崎 服部清三郎 謹議

北地ヨリノ建言 御下問謹讀仕候ニ出張
ノ向一身ノ榮辱ヲ後ニシテ曲ヲ彼ニ鳴シ大ハ
洲ノ安危ヲ先ニシテ直ヲ我ニ取ルニ在リト云
ヘル真ニ着眼ノ第一義ト云ヘシ其策ニ至テ
ハ逐條雄畧奇策感佩スヘシト雖微臣未其
地ヲ經其利害ヲ講ヤサレハ果ノ其言ノ可シ
其策ノ行ハルヘキヤ否ヲ知ラス但内地當今
ノ形勢ヲ以テ之ヲ觀ル時ニ三萬石以下ノ

諸藩決シテ轉封スヘカラス洋人決シテ傭フ
ヘカラス故何如トナレハ比年諸藩疲弊極ル
豈遠地ニ至テ開拓スルノカアラシヤ其費ヲ
官ニ仰カサルヲ得ス方今ノ勢 官モ亦之
ヲ給スルヲ得玉ハシ願フ者アラハ之ヲ允
准シテ可ナリ 官ヨリ命スルハ不可ナリ且
所謂洋人ナル者ハ英佛諸蠻ヲ斥スカ下文
ニ所謂同盟ノ諸蠻ト云ヘルモ亦是欵英拂
ヲ以テ真ニ頼ム可キ者トスルニ似タリ微臣ヲ
以テ之ヲ觀ルニ彼等カ所行譎詭百端決シ

テ不可頼モノ也之ヲ我掌上ニ置キ目指氣
使スルヲ得ハ則可ナリ否サレハ則其力ヲ借
リテ其勢焰ヲ増スヘカラス又五畿八道ノ全
カヲ以テ彼ヲ壓倒セントス其說美ナラサルニ
非ス今全國ノ力ヲ獨リ北地ニ盡シテ内地
空虚ナラハ臣恐クハ四方八面海ニ瀕スルノ
大八洲不虞ノ戒無キヲ保タサルヲ中下大夫
ノ如キモ臣カ所見ハ以テ東京ノ常備兵ト
為ントスルコト先日 御下問ニ奉答スルカ
如シ右ノ四條ニ現ニ見ル所ヲ以テ云フミ若シ

日論

其本ヲ論スレハ金穀器械陸續運輸シテ少クモ關之無キニ非サレハ如何ナル雄畧奇策アリト雖モ徒ニ空論ニ属セン不知即今之ヲ辨スルノ道何如ナルヲ要之短才淺識微臣ノ如キガ敢テ論スル所ニアラスト雖モ亦大八洲ノ安危ヲ先ニスルノ寸心ナリ謹議

十月廿二日

尼崎 服部清三郎

福岡京極常村 宮津 関清 延岡鈴木才藏

新田 峯岸正愿 籍江 河口守 新庄 波多野治高

出石 麻見義備 三日月 高橋智富 久果早川与一郎

秋月 白石貞俊 日出 帆足龍吉 山形 井上八郎

福忍 中野重明

御下問服制各議

尼崎 服部清三郎

今般服色ノ制度^{改定玉}ニト有テ御下問ニ通ノ表謹テ熟覽仕候誠ニ今日ノ急務天下ノ爲ニ欣躍ニ堪ス^{微臣}服色制度ヲ明カニセスト雖モ敢テ心ヲ盡シテ奉答セシハアラス^切惟レニ時ニ汗隆アリ倍ニ厚薄アリ國奢ル時ハ示之以儉國儉ナル時ハ示之以禮太古ノ素朴固ヨリ文明ノ世ニ適スヘカラス中世之靡麗亦^衰榮ノ今ニ語ルヘカラス今新ニ撰定ニ玉フ所頗ル中世以降ノ虚節ヲ



即減シ文質其中ヲ得ルニ幾シト雖モ疲弊時
ニ方テハ猶未タ繁文縟禮ナルヲ不免欤謹テ考
フルニ禮服冠袍表袴ノ三種ハ新制ノ如クシテ
可ナラン中衣ノ如キニ至テハ別ニ之カ制ヲ立テス各
其意ニ随フヲ許シ而メ禁スヘキハ禁スヘシ故ニ
下韮以下ハ除テ可ナリ帶ハ革帶ニシテ玉石ヲ
去^リト^レ劔^ノ野木カヲ用^キ平緒ハ廢スヘシ大率
従前衣冠ト唱フル儀ニ随フヲ善トス雨衣ハ

朝儀ニ関カサレハ亦意ニ随フヲ許シ禁ヲ設クヘ
シ然レモ表^{ニ載ル所}冠ハ制ト文トヲ改メ袍ハ色サヘ

改メラル従前ノ貯フル処悉ク棄物トナル孰ニ之ヲ辨
セシニ其實數百金ニ下ルヘカラス今上下困弊シ
黎民生ヲ聊セス斯時ニ方テ未遽カニ禮文ヲ制ス
ヘカラス譬ハ膏梁滋味アリト雖羸病ノ人ニ食ハシム
ヘカラサルカ如シ七竅ヲ鑿テ渾沌ノ死ヲ致ス有サ
ラニヤ但憂フル所ハ方今披髮胡服ノ士猶未絶ス急
ニ之カ制ヲ立之カ禁ヲ設ケスハアラス願クハ當今簡
便ノ制ヲ定メ先ツ新ニ撰定セラレ所ノ朝服ヲ以
テ禮服トシ常服ヲ以テ朝服ト定メラレ其禁スヘ
ク痛ク禁シ十數年ノ後上下富贍シ黎民安

塔尚衆議ヲ尽シタルヲ待テ後眞ノ禮服ヲ立定メ玉ハシテ臣等
固ヨリ妄味人情時勢ノ適宜ヲ主トシテ敢テ狂
言ヲ獻スル兩謹議

大意

當今簡便ノ制ヲ立テ 朝服ヲ禮服トシ常服ヲ
朝服トシ十數年ノ後國富民安ヲ待テ禮服ヲ立
テルヘシ禮服ト雖モ中衣ハ制ヲ律車設テ制ヲ立テ雜飾ハ律虛文ヲ省クヘシ

同論

三春奥村権之助

廣島新田 岸公原

大岡 人見秀雄

延岡 鈴木刀藏

